

精神分析の視点

生活史の想起

精神分析は、ジークムント・フロイトがヒステリーの患者に催眠を用いて心的外傷を想起させることによる治療を行なったことを発祥とします。想起は回復を促すこともあれば、症状を一過性に悪化させることもあります。しかし心が動く経験を積み重ねることで、患者は成長し生きづらさから解放され、人生を生きなおします。そもそも発病に際して想起が働くこともあります。潜在化している心的外傷の記憶が、後に症状の形をとって想起されるわけです。幼年期からの生活史の重大さを私たちに認識させます。

無意識の発見

精神分析の特徴のひとつは、ヒトに無意識の存在を想定していることです。無意識の存在を証明することは困難といえます。しかしもはや無意識は存在しないと言える状況ではなくなっています。例えば、私たちはまだ決めかねていると意識しているときでさえ、無意識のレベルではすでに心を決めていることがあることが示されています（Galdi et al. Science 2008）。フロイトは心の深層に科学から迫り、無意識の発見はその後の文学や思想にも大きな影響を与えています。

転移・逆転移にかかわるミラーニューロン

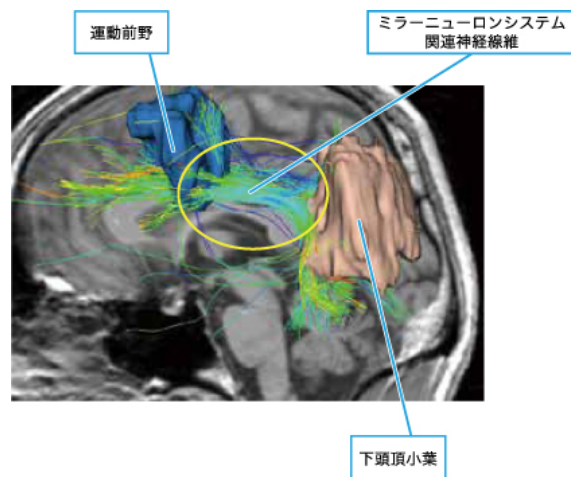
転移とは患者から治療者に向けられる感情で、逆転移とは患者に対して引き起こされる治療者の感情です。ミラーニューロンとは、何か行動しているとき、何か行動しているヒトを見ているとき、鏡写しのように共通して発火する神経細胞のネットワークです。ミラーニューロンはヒトの社会性に不可欠な模倣や共感の役割を果たします。精神分析の軸とされている転移・逆転移にミラーニューロンが関連している可能性が考えられています。脳のMRIの拡散テンソル画像は神経線維を可視化することができ、精神分析の前後の患者におけるミラーニューロンの変化が調べられています。

神経発達症とヒューマノイドロボット

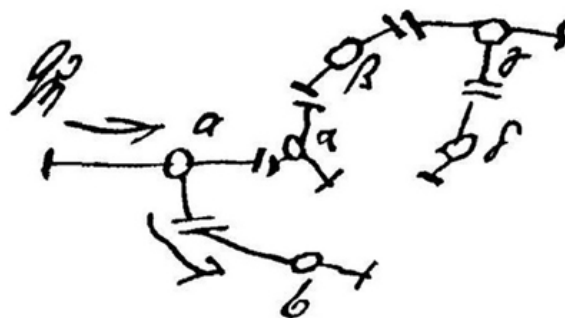
神経発達症（発達障害）の診療では、患者の不安の強さや自己開示の少なさが課題になっています。最近のヒューマノイドロボットはヒト同様の共感や信頼を得ることを目標に開発されてきています。自閉スペクトラム症の患者は複雑な情報処理が苦手な中で、ロボットの表情や視線が情動を伴わないこと、同じ動きが可能なこと、語り調子が調整できることが患者に安心感を与えます。本心が語られないまま自殺する患者や、感情労働を強いられる治療者のことを考えると、転移・逆転移から解放される未来の精神分析の到来が期待されます。

欲動と脳内免疫細胞

フロイトは、ヒトに内在する、生命を保持し統一しようとする生の欲動と、有機体が本来の無機の状態へ戻ろうとする死の欲動を提唱しました。フロイトにとっては自殺やメランコリーは死の欲動であり、良心でさえも死の欲動です。精神疾患や自殺に脳の免疫細胞であるミクログリアの活性化が関与することが脳画像などで明らかになっています。ミクログリアが死の欲動を司っているのではないかとこの仮説が立てられて研究が進められています。



two-tensor tractographyで描出したミラーニューロンシステム関連神経繊維（齋藤幸子 精神神経誌 2023）



Freud's sketch of the neuronal mechanism of the mind (Kato, Kanba. Front Hum Neurosci 2013)